長右衛門のしりあぶり

山梨県

むかし、鶯宿という山間の村に、長右衛門というお百姓がいました。

ある日のこと、長右衛門は、いつものように、馬に炭や薪をつけて里へ売りに行きました。帰りには、油揚げをひと箱買って、ほかの荷物といっしょに馬のくらに乗せて、帰ってきました。短い冬の日のこと、山道を登っていくうちに、だんだん暗くなってきました。

この峠道を油揚げをつけて通れば、むじなに化かされて、油揚げを食われてしまうという話を、長右衛門は、たびたび聞いていました。そこで、ゆだんなくあたりに気を配りながら登っていきました。

ふいに、少し先に、ひとりの小僧が現れました。小僧は、上から下りてきたのでもなし、下から追いぬいたのでもなし、ふいっとそこに現れ出たのでした。長右衛門はびっくりしました。すると、小僧が、

「おれは、鶯宿の長徳寺に行くんだけど、あんまりくたびれたから、少しでいいから、馬に乗せてってくれないか」といいました。長右衛門は、

「いつもなら乗せていってやるが、今日は、こんなにたくさん荷を積んでいるから、無理だ」と断りました。小僧は、

「荷なんかなんぼあってもかまわないから、はじっこに乗せてくれ。そのかわり、お金はうんとはらうから」といいました。長右衛門はしかたなく、

「そんじゃあ、乗せてってやるけど、荷があるから、気をつけないと危ないぞ」といいました。そして、小僧を抱き上げて、馬の背中へ乗せてやりました。そのとき、長右衛門は、小僧の足が毛だらけなのに気がつきました。体も軽くて、人間とは思えませんでした。長右衛門は、心の中で、

「こりゃあ、むじなだ。今に見ていろ。こっぴどい目に合わせてやるからな」と思いました。でも、知らん顔して馬を引いていきました。

峠のてっぺんまで来ると、長右衛門は、

「この馬は、下りになれば、やたら走るから危なくてしかたがない。大事なお客を落としてはいけないから、足を片方しばっておこう」といって、小僧の足を片方、馬のくらにしばりつけました。

しばらく下っていくうちに、長右衛門は、
「どうも、まだ危なくていけない」といって、小僧がいやがるのもかまわず、もう片方の足も、馬のくらにしばりつけました。
「さあ、これでいい」
長右衛門は、そういって、どんどん下っていきました。小僧は、
「もういいから、ここらでおろしてくれ」といいました。けれども、長右衛門は、耳もかさずに、とっととっとと、下っていきました。小僧は、さわいだりあばれたりしましたが、両足がくらにしばりつけられているので、どうすることもできません。
とうとう、鶯宿の長右衛門の家に着きました。
長右衛門は、戸を開けて馬を土間（どま）に入れると、戸をぴっしゃり閉めてかぎをかけました。そして、おかみさんに、
「お客さんを連れてきたぞ。すぐに火を起こせ」といいました。おかみさんは、
「あんた、何ごとだい」といいながらも、いろりに、炭や薪をほうりこんでうんと火を起こしました。そして、長右衛門が小僧の両手を持ち、おかみさんが小僧の両足を持って、いろりの火の上でひっぱりました。そうやって、小僧のおしりをじりじりとあぶりました。小僧は、
「あつつつう、あつつつう」といってばたばたあばれました。そして、たちまちむじなのすがたになって、
「おれはこの峠のむじなだ。もう二度と人に化けて悪いことをしないから、ゆるしてくれ」といいました。
「そんなうまいことといっても、その手には乗らないぞ」
長右衛門は、そういって、まだまだ放してやりませんでした。むじなのおしりの毛はみんな焼けてちぢれてしまいました。
「うそじゃない。これからは、二度と再びこの峠には出ないから、かんにんしてくれ」
むじながあんまりいうので、長右衛門はかわいそうになって、
「それほどいうなら放してやるが、これからは、きっと悪さをするんじゃないぞ」といって、むじなを外へ出してやりました。
ところが、そのあと、馬の積み荷を見たら、ひと箱買ってきたはずの油揚げがみんななく

なっていました。

それからしばらくの間、長右衛門の家の裏山（うらやま）から、毎晩大きな声で、

「長右衛門のしりあぶり　長右衛門のしりあぶり」とさけぶ声が聞こえたということです。

おしまい

村上郁再話

資料『続甲斐昔話集』土橋里木／郷土研究社